きょらの郷 奄美
Beautiful Homeland Amami

歴史を語る

Telling the story of Amami's history

南海に浮かぶ奄美大島は、世界的にも特異な歴史をもつことで知られています。長く続いた狩猟採集生活、そして平安貴族や世界遺産・平泉の中尊寺とも関わるヤコウガイ産地としての魅力的な時代のほか、琉球国や薩摩藩、アメリカ軍と様々な支配下におかれた苦難の時代もありました。

Amami Oshima, located in the South Seas, is reknowned worldwide for its singular history. During a long, fascinating period of hunting and gathering、 the area's status as a source of Great Green Turbo shellfish brought it into contact with the Taira clan and the World Heritage Chuson-ji Temple in Hiraizumi, Iwate Prefecture. Tumultuous periods of rule by the Ryukyu Kingdom and Satsuma Clan and occupational rule by the American military followed.

旧石器時代

近年、奄美群島では旧石器時代に相当すると考えられる遺跡が出土されており、奄美市笠利町でも発見が相次いでいます。土浜ヤーヤ遺跡からは、当時使っていた半磨製石斧が出土し、その地層の分析から約2万3千年前という年代が示されています。喜子川遺跡からは、石蒸し料理をしていた集石遺構や、石器を作る際にできるチャート製の「剥片」が2万5千年前の地層から出土。赤木名城からも同様のものや石器が発見されました。

イャンヤ洞穴遺跡(奄美市笠利町)は、約23,000年前のものと推定されている(国指定遺跡)。

縄文時代

奄美群島独自の宇宿下層式土器
(宇宿小学校構内遺跡出土)

▲宇宿貝塚(国指定史跡)

この頃になると、奄美でも土器が作られました。現在、一番古いとされているのが、爪形文土器です。イャンヤ遺跡で最初に発見され、その後宇宿高又遺跡や喜子川遺跡からも発見されました。また縄文時代後期には、竹籠を編んだような奄美群島独自の土器が宇宿貝塚から発見され、「宇宿下層式土器」と命名されました。南九州の土器文化の影響を受けて作られたといわれています。また、この上の層で発見された文様のない「宇宿上層式土器」は縄文時代晩期のもので、奄美群島を中心に広く分布しています。

弥生〜古代並行期

この時代は、九州島とのつながりが深い時代でした。力を持った九州の特権階級たちは、自分の力を誇示するため、琉球列島に生息するゴホウラやイモガイ、オオツタノハ等の大型貝類で腕輪などを作り、「威信材」にしていました。奄美へは、季節風に乗って南下・北上をしていたようです。

奄美市笠利町の東海岸に位置する土盛マツノト遺跡(8〜10世紀)から、兼久式土器や大和から移入された土師器や須恵器と鉄、銅製品、ガラス製管玉など

イモガイ製トウテツ文具符
(サウチ遺跡出土)

◀オオツタノハ貝輪
(宇宿小学校構内遺跡出土)

が見つかり、大量のヤコウガイとヤコウガイの貝製容器や製作途中の破片も出土しました。また、用見崎遺跡や長浜金久遺跡、小湊フワガネク遺跡からも同様な遺物が出土したことから、奄美の人々は海辺で狩猟採集生活を送りながら、大和や中国の人々とヤコウガイ交易などをしていたと考えられています。

また、平安貴族がヤコウガイを用いたことが文献に記されていますが、屋久島以南でしか採取できない貝なので、奄美がヤコウガイの採取・加工する一大拠点であったのではないかと考えられています。日宋貿易に従事していたと考えられる商人の様子が『新猿楽記』に描かれていて、北はソトガハマ(青森)から南はキカイガシマ(鹿児島南方海域)までヤコウガイや硫黄、舶来の唐物などを取り扱い、列島規模で移動していたようです。

中世

奄美では中世の遺跡発見が相次ぎ、この時代が、九州島や中国、朝鮮半島との交易や交流が盛んになり、村を形成し共同社会へと大きくジャンプしたことがわかってきました。そして、勢力を持った琉球の「按司」と同様な人々が台頭し、政治的拠点としてのグスクが築城されるようになります。

11世紀になると、狩猟採集社会からイネやムギを栽培する農耕社会へ変化する兆しが最近の発掘で明らかになってきました。赤木名城からも、11世紀中頃のイネ、オオムギ、アワ、キビなどの栽培植物が出土しています。

琉球王国統治時代

1429年に琉球王国が成立すると、15世紀中頃には奄美群島はその支配下に入り、琉球王から任命された女性祭祀者(ノロ)による地域統治が行われました。奄美市名瀬の大熊・浦上・有屋・仲勝の輪内地区は、かつてノロ祭祀が盛んに行われていた所で、今でもトネヤ跡が残されています。

小湊フワガネク遺跡
(国指定史跡)

ヤコウガイ
貝さじ完成品

12世紀〜17世紀まで使用された赤木名城跡(国指定史跡)

琉球王国支配下に、
祭政一致の権力者だった
祝女(ノロ)の扇

薩摩藩統治時代

1609年、薩摩藩が侵攻し、奄美はその統治下に入ります。1690年にサトウキビの技術が導入されると、キビ作が特産品として奨励されるようになりました。その後、「換糖上納令」により、サトウキビ生産に重点を置かれるようになると、食糧生産が乏しくなり、飢饉時には一家離散や村潰れなども生み出すことになりました。また、税が納められなくなると、ヤンチュ(家人)と呼ばれる下人や下女なども生み出すこととなり、士族身分の郷士格や島役人と百姓などとの階層分化や、農民一揆が起こるようになりました。

幕末の奄美民俗誌「南島雑話」
(名越左源太著・奄美博物館蔵)

近代

1868年に明治維新となり、薩摩藩による支配は終わりとなりましたが、鹿児島県による黒糖専売は続き、1874年(明治7年)には、鹿児島県の大島商社による専売制が結ばれています。その後、丸田南里らが黒糖の自由売買運動を展開し、1878年(明治11年)に大島商社は解体し、ようやく黒糖が自由売買となりました。

代官所跡(奄美市笠利町)

米軍占領統治時代

その後、奄美も近代化が進んで行きますが、第二次世界大戦で日本が敗戦を迎えると、奄美群島は翌年には、「2・2宣言」により、日本から行政分離され、米軍の統治下におかれることになりました。

引揚者も多く人口が増えたにもかかわらず、本土との航海全面禁止のため、食料や日常品など物資は常に不足していました。島民は、ソテツなどで飢えをしのいでいました。

逼迫した生活のなかで、日本復帰運動が全郡的に広がりを見せ、奄美大島復帰協議会の泉 芳朗議長らによる復帰への署名運動や断食による抵抗運動、さらには、本土在住の奄美出身者たちによる国への陳情活動などにより、1945年12月25日、奄美群島は日本へ復帰することができました。

断食で日本復帰運動をする人々

日本復帰を喜ぶ人々(鹿児島県)

日本復帰の調印式(鹿児島県)